

Title	エスノメソドロジー研究のなかの映像利用：想起と教示を支援する
Sub Title	Using visual resources in ethnomethodological investigations
Author	吉川, 侑輝(Yoshikawa, Yūki)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2021
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.26 (2021. 7) ,p.22- 33
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：映像を使う社会学
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20210703-0022

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

エスノメソドロジー研究のなかの映像利用

——想起と教示を支援する——

Using Visual Resources in Ethnomethodological Investigations

吉川 侑輝

1. はじめに

本稿の目的は、エスノメソドロジー研究における映像の利用のひとつの在り方を、近年の事情についての情報提供などもふまえながら紹介することである。続く第 2 節ではまず、エスノメソドロジーという研究方針の基本的な着想が説明される。そこで論じられるのは、エスノメソドロジーはその成果を、対象となっている実践の詳細を「想起」したりそれを「教示」したりするために利用可能であるということである。続く第 3 節では、第 2 節における内容をふまえ、研究活動としてのエスノメソドロジーにおける映像技術の位置づけを明確化することを試みたい。ここでは主として、エスノメソドロジー研究を進めていく過程において利用可能な様々なデータのひとつのタイプとして、映像が位置づけられる。そのうえで本稿は、第 4 節において、エスノメソドロジーにおける映像の利用が備えうる課題について論じる。併せて最後には、エスノメソドロジーにおける映像をいわば研究過程においてではなく、研究成果として利用するという方が成立する可能性について言及する。

2. エスノメソドロジー研究とはなにか——想起と教示を中心に

本稿がなすことのひとつは、エスノメソドロジーにおける映像という技術の位置づけを論じるということである。そのためにはまず、エスノメソドロジーとはどのような研究方針であるかを、簡単にでも、説明しておく必要があるだろう。もちろんエスノメソドロジーには、すでに多くの入門や概説のための、すぐれた文章がある¹⁾。そうしたことを前提したうえで、本節ではエスノメソドロジーについて本稿の関心に関連する範囲でのみ論じておきたい。

私たちの社会生活は、様々なことが「分かってしまう」ことによって、なりたっている——エスノメソドロジー研究はまず、この素朴な気づきとともに、開始される。「分かってしまう」ことのあり方には様々なものがあるが、そのひとつは、一瞥の理解（浦野 2004: 159-61）とでも表現可能なものである。この表現が意味していることとはすなわち、私たちは、なにかをぱっと見たり（または聞いたり）したときにそれがなにであるかが「分かってしまう」ことがあるということだ。街を歩いていると、放置されている自転車を目にする必要がある。放置されている自転車を見分けるために普通、その自転車を念入りに調べたりする必要はない。それはたいてい、「ぱっと見て」わかるものである。放置自転車でなくてもよい。街の中を歩くことはたとえば、車が曲がってくること、学生の集団が下校中であること、カップルが何やら言い争いをしていること、会社員が休憩をしていること、……等々といったたくさんの「分かってしまうこと」との遭遇とともにある。いまたまた、街の中で出会う「分かってしまう」ことを取り上げたけれども、街の中でなくてもよい。自分の家であれ、他人の家であれ、職場であれ、学校であれ、病院であれ、商業施設であれ、旅行先であれ、そこには様々な「分かってしまう」ことがある。むしろ放置自転車のように、素人目に見て

すぐ「分かってしまう」ことばかりがあるわけではない。なかには、一瞥しても十分には「分からない」こともあるだろう。そのひとつに、専門（職）的なものの見方（や聞き方）とともに得られる理解というものがある（Goodwin 2010）。最近（2021年1月）、内視鏡の検査をうけ、自分の腸の内部をディスプレイ越しに見る機会を得たことがあった。検査では医師が、ディスプレイに映し出されているものの説明——「実況」といった方がよいかもしれない——を行いながら、カメラを進めていく。医師による「たんなる泡」とか「小さいポリープ」といった分節化は、画面に映る様々な事物を、秩序立てていく。確かに私のような素人からすれば、医師の説明なくしてディスプレイに表示されている事物を直ちに理解するのは、難しいことであるように思える。しかしながらそれでも、医師からすれば、この説明活動が訓練の結果としてもたらされたであろう専門的な物の見方 *professional vision* にそくしてまずは「分かってしまう」ということがともなっているという事情は変わらない。それに、医師の説明をともなう内視鏡の検査がそのひとつの例であるように、そうした説明をうけることによって、自分たちが今何を見ているのかといったことは、段々と分かってくるようになるものだ。エスノメソドロジスト（エスノメソドロジーの研究者はこう呼ばれる）のチャールズ・グッディンは、法廷や考古学の発掘場面などを事例として、検察や考古学者といった専門家による教示とともに、非専門家たちの視角野が組織されていく場面を分析している（Goodwin 2010）。グッディンの分析が例証してもいるように、ぱっと見て、すなわち一瞥して「分からない」場合があるからといって、それが「分かり得ない」ことを意味するわけではない。

私たちの社会生活のなかには、「分からない」こともあるではないかと思われるかもしれないが、実のところ「分からない」こともまた、「分かってしまう」ことの、ひとつの積極的なあり方にほかならない。実際のところ、何の変哲もない日常生活においてさえ、何かが「わからない」という事態はいくらでも生じうる。例えば、話しかけたのに無視された、何やら機嫌を損ねているようである、メールの返事が返ってこない、……等々のようなことが起きたとき、私たちは家族が、友人が、同僚が、隣人が、そしてあるいは他人が、何を考えているのか「分からない」といった思いを抱くことがある。けれども「分からない」ことがあるからといって、そこに「分かること」が無いのだと言ったりすることはできない。ここで生じているのは実のところ、むしろ反対のことであるだろう。いま注意すべきは、話しかけたりメールを送ったりしたにもかかわらず然るべき返事がないといった、見てそれと分かることが生じたとき初めて、私たちは、その事態について「無視された」とか「返事が返ってこない」といった表現を与えることができる、ということである。この意味で「分からない」こととは、「行為と行為の目に見えるつながりに与えられたひとつの名前」（串田 2010: 19）なのである。すなわち「分からない」とは必ずしも「分かってしまう」ことに対して排他的に対をなす事態ではなく、「分かってしまう」ことの、ひとつの在り方なのだ。こうして何かが「分からない」という事態は、社会生活が様々なことが「分かってしまう」ことによって成り立っているという最初の気づきを脅かしたりするものとはならない。「分からないこと」は「分からないこと」というひとつの個別具体的な「分かってしまう」こととして、いわば秩序だった仕方でのみ生じうるものなのである。

いま「分かってしまう」ことのいくつかの水準を示したが、エスノメソドロジーは、こうした「分かってしまう」ということについて、それがいかなる方法とともにあるのかを解明する。一瞥の理解であれ、漸次的な理解であれ、そしてなにかが「分からない」ということ

であれ、あらゆる理解は、すでに述べたように、目に見える（あるいは聞こえる）編み上げられた様々な表現同士のつながりについて導かれる理解である。であるなら、この社会生活を満たす様々な理解のあり方は、当の理解を可能にしている表現同士の結びつきを丹念に辿りなおすことによって、解明することができるはずだ。ここで注意すべきは、この私たちの社会生活を構成する理解というものは、決して出鱈目には生じえないということである。あの車が曲がってくることを、どういうわけだか分かってしまうということが、交通のよどみない流れを可能にしている。「分かってしまう」ことは、あるひとりの人間が好き勝手にそう主張できるものでなく、少なくとも潜在的には誰もが得られるような、いわば「公的な」事柄なのである。交通が車のよどみない運行によって成り立っているとしても、もちろん交通事故は起きてしまう。けれどもそれはやはり、見ているべきものを見ていなかったとか、あるいは逆に「人が飛び出してくるようには見えなかった」などという理解の可能性とともに、誰にでも起こりうるものとして起こる。よどみない交通であれその破れであれ、そこには繰り返し利用可能な公的なやり方があるのであり、それがさきほど「方法」と述べたことの含意である。さて社会学は、人間がなす様々な営為について関心をもっている。であるなら、この学問の少なくとも一画に、社会生活を組み立てていく方法それ自体を丹念に、いわば直接解明していくような方針が位置づいてもよいはずだ。エスノメソドロロジーは、アメリカの社会学者ハロルド・ガーフィンケルによって、社会生活を理解／編成するために利用されている様々な方法（エスノメソッド）を解明するために 1960 年代に案出された表現である（Garfinkel 1967）。既に述べたように、社会生活を満たしている理解には、様々な水準がある。エスノメソドロロジーはこうした様々な水準における理解を、その編成において利用されている表現と方法にそくして、特定しなおしていく（Garfinkel 2002）のである。

さて、こうしたことをふまえると、エスノメソドロロジーの成果の在り方には、少なくとも 2 つのあり方があるということを導くことができる。

そのひとつは、方法（エスノメソッド）を「想起す（リマインドする）」ということである。これは、エスノメソドロロジーが「分かってしまう」ことから開始されることを考えれば、ひとつの、必然的な方針であるだろう。もしある人が何らかの活動なり場面について理解を導くこと——つまり「分かってしまう」こと——ができるのであれば、その人は当該場面がいかなる方法をつうじて編成されているかを、うまく言葉を使って表現できるとは限らないにしても、何らの意味で既に知っているはずである。であるなら、そのような人にとってエスノメソドロロジー研究は、当の理解がどのようにしてもたらされているかを、改めて省察的に振り返っていくような作業となるはずだ。エスノメソドロロジー研究を日常言語学派の哲学やルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインの後期哲学と関連づけながら展開するジェフ・クルターは、エスノメソドロロジー研究において利用される素材（データのことでありと考える）を「精巧なリマインダー」（Coulter 1983）と呼んでいる。エスノメソドロロジーは社会生活の詳細を、現実が生じた個別具体的な場面にそくして解明していく。そしてそのために、後述もするような様々な技法を利用して、経験的なデータを集める。だからといって、そこでは対象が備えている形式的な特徴やパターンをいわば経験主義的に明らかにしていくことが目指されているわけではない（Nishizaka 2015; 西阪 2018a: 253）。そうではなく、私たち自身に取り組んでいる「やり方の知識」（西阪 1998: 212）を明確にしていくことが目指されているのである²⁾。ガーフィンケルはエスノメソッドについて、「見られてはいるが気づかれない」ものであると特徴づけている（ガーフィンケル 1995: 35, 2004: 236-7）。このように、

エスノメソドロロジー研究が研究成果として目指すひとつの在り方は、研究の読み手が「明確には意識したことなかったけど、いわれてみれば確かにこういうことをしている」であるとか、「私（たち）がやっていることが言葉で表現されている」という風に思えるような分析なのである。

エスノメソドロロジーの成果のもうひとつの在り方はいわば、読み手に実践の詳細を「教える（インストラクトする）」というものである。こちらは主に、「専門的な」場面のエスノメソドロロジーにかかわるものだ。すでに述べたように、「分かってしまう」ことには、様々な水準がある。「放置自転車」や道端での「カップルの喧嘩」は誰にとっても一瞥で理解できることであろうが、医療や芸術などをはじめとした専門的实践となれば、そう簡単にはいかないこともあるだろう。しかしすでに述べたように、なんらかのいみでも専門的实践であっても、結局のところ目に見える（または、聞こえる）表現の組み合わせをもとにして様々な現象が組み立てられているのでなくてはならないという事情は変わらない。であるなら、専門的な実践の編成を、当の専門的理解を導くための方法とともに明らかにすることは、「分からない」いわば「素人の」読み手に対しても、いかにして当該実践が組み立てられているか（すなわちエスノメソッド）を、教示する（つまり教える）ことになりうるはずである。もちろん、ある研究が「想起（リマインダー）」となるか「教示（インストラクション）」となるかは、読み手の能力にも依存することであるので、この区別は絶対的なものではない。なおガーフィンケルは、このような教示としても利用可能なエスノメソドロロジー研究のことをさして、「ハイブリッド・スタディーズ」（Garfinkel 2002; 池谷 2007, 2019）と呼んでいる。ガーフィンケルはその著書や論文のなかでハイブリッド・スタディーズの実例を繰り返し挙げているが、それらには、ジャズ・ピアノにおける即興演奏の習得過程を研究対象とした『鍵盤を駆ける手 *Ways of the Hand*』（サドナウ 1993; Sudnow 2001）というタイトルをもつ自己エスノグラフィ的著作を著したエスノメソドロジストであるデヴィッド・サドナウによって編まれ、実際に演奏教育などに利用された「サドナウ・メソッド *Sudnow method*」とよばれるジャズ・ピアノ演奏の教示プログラムなどが、含まれている（Garfinkel 2002: 102）³⁾。

3. エスノメソドロロジーのなかの映像利用——想起と教示の支援

エスノメソドロロジーの方向性をいま「想起」や「教示」を中心として記述したが、エスノメソドロロジーにおける映像の位置づけは、この「想起」ということにかかわるものとしてみると、いくぶんか考えやすくなる。言ってしまうえば、エスノメソドロロジーにおいて映像とは、この「想起」を支援するために利用可能なひとつの技術という位置づけを与えられているのである。しばしば指摘されるように、映像という表現には、様々な特徴がある。ここでは、ビデオ映像を想定したうえで、2つほど挙げてみよう（秋谷 2019: 28）。第1に映像は、それが撮影された場面において利用されている「発話」や「身体動作」などといった資源を記録する。発話や身体動作といったこれらの要素は、その場面における「見える」ものであったり、「聞こえる」ものであったりするであろう。つまり映像は、当該場面における目に見えるものや聞こえるものを記録するのである。第2に、映像は、それが何らかの記録メディアに残されることによって、反復的に検討可能なデータとして利用できる。既に述べたように、私たちは確かに目に見える／聞こえる、いわば認識可能な資源を利用しながら、理解を導くことがすでにできている。そしてしばしばそれらは、たとえば一瞥の理解がそうであるように、時間的に一瞬にして（いわば無時間的に）導かれるものである。しかしだからといって、

その理解がどのように導かれているかということそれ自体を理解しなおす——いわば想起す——営みが、無時間的に可能であるということにはならない。このとき映像が繰り返し利用可能であれば、私たちが無時間的に導いているような理解がどのような方法のもとで編成されているかを、丹念に想起することの支援として利用することができる。いわばビデオ映像というものは、私たちが理解を導いているときに利用している視聴覚的な資源を、丁寧に振り返りながら検討することを可能にするのである。

他方でこの映像という技術は、決して万能な技術ではなく、——その他のあらゆる技術と同様——いくつもの制約がある技術でもあることには注意が必要である。たとえば映像には、当然ながら、におい、肌触り、……等々を残すことはできないが、こうした資源が日常的な活動において利用されている局面などというのは、いくらでもあるだろう。しばしば朝起きたときに雨が降っていることに気づくことがあるが、このとき湿気やにおいはこの「気づき」（分かってしまうこと）を構成する重要な要素でありうるように思える。また写真であれビデオであれ、映像はそれが撮影された前後の時間を切り落とすことがある。人々が行っている活動はしばしば長大な時間をかけて編成されることがあるであろうが、こうした活動の一部始終を映像というメディアだけがとらえることは、難しいことであるだろう——とはいえ再び、映像が「カットされている」という理解それ自体が、映像に映っていることを通じて様々に「分かってしまう」ことのひとつなのであるが。さらに、よりプラクティカルには映像は、実践の詳細を克明に記録するというその利点ゆえに、主にフィールドにおいて生活をおくる人々からの要望によって、調査等において利用できないこともある。私自身しばしば病院や介護施設で調査をすることがあるが、ビデオカメラや音声レコーダーの利用が許可されなかった経験は、幾度となくある。もちろんカメラやレコーダーといった機材の利用に先立っては、利用範囲や匿名化の方針についての取り決めを交わすし、データ自体も厳重に保存される（南出・秋谷 2013: 17-35）。それでも映像機材を利用することが許されるのでなければ、どのような理由であれ、それを使うことは許されない。

先に映像はひとつの技術であるとして書いておいたが、これは映像が、決して唯一の技術ではないということを強調する必要があるからに他ならない。今日エスノメソドロロジーにおいては会話分析や相互行為分析が隆盛を極めており、それらの多くは調査技術としてビデオカメラを利用する。このいみでエスノメソドロロジーにおいて、調査手法として映像を利用すること、はたしかに事実上ドミナントなものであるといえよう。しかしながら、エスノメソドロロジーの方針のもとで書かれた論文や本を紐解いてみれば、そこでは実際には映像以外の様々な技術が使われることがわかる。たとえば、映像を含まないような録音データは、とくにインタビューを行うときなど、いまなお重要なデータのひとつである（鶴田 2009; 松永 2017, 2020）。また、人々のメディア実践をめぐるエスノメソドロロジー研究に取り組むさいには、報道写真や広告、そしてマンガなどが分析されることがある（Jayyusi 1993; 是永 2017）。また近年では、伝統的な調査道具としてのフィールドノートなどをその主要な対象として分析するようなエスノメソドロロジー研究（木下 2016; 團 2016）が進められている。エリック・リヴィングストンは数学における証明のエスノメソドロロジー研究を行っており、かれの研究は図や記号を対象としたエスノメソドロロジーの事例といえるかもしれない（Livingston 1987）。ロッド・ワトソン（Watson 2009）は、社会学における専門的なテキストの分析を、ゴフマンのテキストなどを事例におこなっている。また近年では、ウェブにおける相互行為分析なども盛んである（酒井 2010）。

こうしたエスノメソドロロジーの多様性を列挙しようとすれば、枚挙にいとまがないが、こうした多様性は、そもそも私たちの実践が多様であることの、必然的な帰結である。先にエスノメソドロロジーが社会生活のなかの「分かってしまう」ことをひとつの開始点に据えながら進められると述べた。このとき「分かってしまう」ことは、「見てわかること」や「聞いてわかること」を含めた、実に多様な資源から組み立てられているはずだ。それだけでなく、「分かってしまう」ことは、一台のビデオカメラでは収録しきれないような、広い時空間を占めることがありうる。であるなら、そのような「分かってしまう」ことをその方法とともに跡づけていこうとするエスノメソドロロジーは、それを進める際に利用する技術を、研究を開始する前に決めてしまうわけにはいかないのである。むしろ逆に、エスノメソドロロジー研究は、対象の特徴に即して集めるべきデータのタイプを吟味することから始める必要がある。

とはいえ、実際のところ、映像の利用は EM の研究過程におけるいくつかの場面で事実上基盤的な（標準的な）調査技術となっていることは否めない（おそらく、その研究活動において映像を全く利用しないというエスノメソドロジストたちは多くはない）。これには、制度的な理由と歴史的な理由がかかわっている。制度的な理由としては、エスノメソドロロジーはその訓練や教育過程において、映像を利用することが一般化されているという事情がある。今日エスノメソドロロジーにおいて会話分析が隆盛を極めていることは、すでに述べた。このことにより、エスノメソドロロジーのトレーニングはしばしば、会話分析のトレーニングを通じてなされる。当の会話分析はすでに述べたように近年、ビデオを利用した相互行為分析として展開している。このために、エスノメソドロロジー研究者の多くが、映像の利用や分析に結果として習熟するというわけである。いま述べたエスノメソドロロジーにおいて会話分析が隆盛を極めていることの背景には、もうひとつの、歴史的な理由がかかわっている。それは、エスノメソドロロジーの黎明期にオープンリール形式の録音機が利用可能だったことであり、そもそもそのことが、会話分析の隆盛をもたらしたということだ（秋谷 2017: 224, 2019: 27）。そしてエスノメソドロロジーにおける今日の映像利用の隆盛は、会話分析の隆盛の延長線上にある（秋谷 2017: 224-5）。

さて、こうしたエスノメソドロロジー研究における映像利用は、主に、フィールドワークの一部とデータセッションの場面という 2 つの局面において、いわばその研究過程においてなされていることを、付言しておきたい。

研究過程における第 1 の局面は、フィールドワークである。本稿を含むこの度の特集が例証しているように、フィールドワークにおける映像の利用は、エスノメソドロロジーにおけるそれに限らず、ありふれたものであるだろう。このとき、必ずしもエスノメソドロロジーの方針で行われないフィールドワークにおいてもそうであるように、調査過程において映像は、あくまでもその一部においてのみ利用されることに注意する必要がある。このことは単に、調査者が映像以外のメディアを利用しながらその一部として映像を利用する必要がある、ということの意味しているのではない。そうではなく、フィールドワークにおいてその開始時からビデオカメラを利用することが通常許可されないのである。ビデオカメラなどの映像機器を利用することの前提には、調査対象者への入念な説明とおこなったうえで、十分な信頼を構築し、その上で同意を得る必要がある。そしてその過程にはふつう、インタビューや参与観察をはじめとしたさまざまな調査過程がともなっているものだ。この社会調査者が対処する必要のある実践的な事情は、エスノメソドロロジーにおいてもなんら変わりはないのである。したがって、その研究活動において映像を利用するからといって、最初から最後

まで映像を撮ったりするといったことなどということにはならない。むしろ映像とはある意味で、フィールドワークの最後の段階においてはじめて利用することが許されるような技術なのである。このように映像は、単に調査の過程において位置づけられるだけでなく、あくまでもそのごく一部をしめているに過ぎない。

第 2 の局面は、データセッションである。多くの社会学者がおこなうフィールドワークとはことなり、映像が利用されるもうひとつの研究過程としてのデータセッションは、ある程度の説明が必要なものであるだろう。これは、たとえば映像を中心とした研究についていえば、フィールドワークを終えた後やその過程においてエスノメソドロジストたちが集まり、データにおいて「分かってしまうこと」を、データにそくして議論するという活動である。何かが「分かってしまう」ことの根拠——とあえて表現しておこう——がデータの中にあるからといって、私たちが何を手掛かりとしながら理解を導いているのかを想起することは、決して簡単なことではない。そこでエスノメソドロジストたちは、データのなかに何が理解できるか、その理解はどのような見えとともに形作られているか、といったことを、あくまでもデータにおいて観察可能な特徴にそくして議論するのである (cf. 池谷 2016)。これはいわば、直観を、集合的に洗練させていく作業とでもよぶことができるだろう。データセッションを分析の過程ととらえるか、それともあくまでもエスノメソドロジー教育の一環ととらえるかについては、複数の見解が存在している (e.g. 西阪 2018b)。研究生活におけるデータセッションの位置づけについて多少の差異はあるとはいえ、それでも、それをどのエスノメソドロジストも重視していることは変わりがない。

いま、エスノメソドロジーにおける映像は、その研究過程において利用されるということ述べたが、このことは逆にいえば、それが研究の成果として利用されるということとは実のところほとんど見られないということでもある。映像人類学や映像社会学における映像の扱いと違い、エスノメソドロジー研究の過程において利用された映像は、狭い意味での「公開」は、なされないのである。こうした事情は、エスノメソドロジー研究の最終的な成果というものが普通、「論文」や「書籍」といったテキストをつうじて提示されるという、再び制度的な理由によっている。いわば映像がアカデミズムの成果公開にかかわる慣習に馴染まないという事情が、エスノメソドロジー研究においても生じているというわけだ。実際のところ、個別の議論において読者に提示されるのは、「トランスクリプト」という、録画・録音物の転写物である。映像の転写にはいくつかの慣習的なやり方があるが、それぞれの転写法の考案者や改良者のなまえを付して、一般的にはジェファソン・システム (Jefferson 2004) とよばれる表記法が、映像における身体の同期などを表現するためにはグッディン (Goodwin 1981) による表記システムが、そして近年ではモンダダ・コンヴェンション (Mondada 2007) とよばれる転記システムが利用されている。この慣習的に定められた方法によって表現されたトランスクリプトを掲載するというやり方には利点がある。そのひとつは、第三者による再分析可能性の担保である。トランスクリプトによって転記されるのは、もとの視聴覚データにふくまれていた観察可能な詳細である。このとき、分析者がその観察可能な詳細にそくして議論をすすめていることが、まさにそのトランスクリプトをつうじて、例証されるのである。他方、トランスクリプトには、その独特な表記法ゆえに、ちょっとした訓練が必要であるという難点もある。ともあれ、エスノメソドロジーにおいて盛んに利用される映像が成果の部分に登場しないのは、アカデミズムがテキスト偏重だからであるにすぎない。逆に言えば、それが利用可能な局面において映像は、さかんに利用される。実際のところ、口頭発

表のプレゼンテーション場面などでは、トランスクリプトのみならず映像が——もちろん匿名化されたうえで——オーディエンスに対して提示される。アカデミズムにおけるテキスト偏重の傾向が変化することがあれば、それにともない、エスノメソドロジーにおける成果公開の在り方も変化することが予想される⁴⁾。

最後に、こうした背景のもとで、エスノメソドロジー研究にかかわるかたちで、多くのエスノメソドロジストたちが、映像を利用するためのやり方を概説的に説明することなども、盛んになされてきたことを付言しておきたい。つまりエスノメソドロジー研究を進めるさいに、ビデオカメラをどのように設置して映像を撮るのか、データをどう管理するか、どう書きおこすか、どう分析するか、そもそもどう許諾をとるのか、……等々の、映像の利用法についての概説的な議論の蓄積がある（Goodwin 1981, 1993; 山崎敬一他 1997; 山崎晶子他 2004; ten Have 2004, 2007; 南出 & 秋谷 2013; 細馬・菊地編 2019）。こうした技術論⁵⁾の蓄積は、エスノメソドロジーの展開が社会生活の詳細を研究の俎上に載せるための不断的努力とともにあったこと、そしてその努力の中心的位置に映像が位置づいてきたことを物語るものである。

4. 議論

ここまで、エスノメソドロジーにおける映像利用の位置づけを、簡単にではあるが、紹介をしてきた。あえて要約すれば、エスノメソドロジーにおける映像とは、社会生活の詳細を想起したり、それを教示したりするために利用可能な技術のひとつであるということだ。先述のように映像利用には、そのメディアの特徴にそくして、様々なメリットと、同時にデメリットが存在する。したがって、その利用にさいしては、映像という技術がそなえる性能（特徴と制約）を見極めることが重要である。確かに映像にだけできることはあるだろう。しかしながらそれはテキストや画像であってもまったく同様であり、このことはいずれかのメディアが、他のメディアに対して無前提に優位であるということの意味しない。このいみで、映像という表現形式だけに過剰なロマン的期待をむけることには、慎重であるべきだ。

こうしたことを踏まえれば、エスノメソドロジーにおける課題のひとつは、映像以外の多様な技術をエスノメソドロジー研究の自然な在り方の中に、どのように取り入れていくかということの方にあるように思える。エスノメソドロジーにおいて映像は、すでにありふれた技術である。むしろテキストや記号などといった映像以外の多様な表現にかかわる技術のほうが、エスノメソドロジーにおいて既に蓄積されているような映像を分析する技術からも学ぶということがあってよい。このとき、方法論的なレベルにおける考察、つまりそもそもエスノメソドロジーとはなにをすることなのかということについての理解が不可欠であることは、言うまでもない。ともすれば、この方針は、これは社会学というより広い文脈において映像の利用を進めていくという方針からすれば、やや「退行的」にも見える方針であるかもしれない。映像によって記録されるような様態は確かに、私たちの社会生活の極めて重要な部分を占めていることも確かである。けれども、私たちの社会生活は、ビデオによってとらえることにこそ意味があるような様態のみによって形づくられているのではない。映像の利用を進めていくと同時にそれ以外の多様な技術の可能性を検討したり再定式化していったりすることは、エスノメソドロジーが社会生活をその詳細において探求することに伴っているべき作業である。

今述べたのとは逆に、映像という技術をエスノメソドロジーのなかでいかに拡大していくかということもまた、ひとつの課題を構成しうるように思われる。先述のように、エスノメソドロジーにおける映像利用は、いわば研究の過程においてのみ利用されている技術である。

そしてエスノメソドロロジーの成果としてテキスト（論文や書籍など）が主要なありかたとなっているという傾向は、エスノメソドロロジー研究が扱う個別の対象にもとづく特徴でなく、むしろエスノメソドロロジーの主な母体であるところの社会学をふくむ、アカデミズムが備えている特徴に由来するものだ。このとき、トランスクリプトの可読性の低さなどに由来する仕方でもしエスノメソドロロジー研究の成果がいくぶんか理解の難しいものになっているということがあれば、エスノメソドロロジーの成果が「想起」や「教示」を目指すという文脈に照らし合わせると、本末転倒である。それでは、エスノメソドロロジー研究の読み手が直面する付加を軽減するためには、いかなる方策がとれるであろうか。ひとつには、映像をエスノメソドロロジーの研究成果として利用するということが考えられてよいと思われる。テキストでないメディアを通じてその成果を公開したエスノメソドロジストとして、サドナウがいる。たとえば、かれが即興演奏のエスノメソドロロジー研究をつうじて構築したサドナウ・メソッドの販売用教材には、80-90 年代にはカセットテープ（徳丸 1993: 259-60）が、そしてある時期からは、ビデオ映像が含まれていた⁶⁾。サドナウがエスノメソドロロジーの実践としてこの教材を提示したかどうかはわからないが、先述のようにガーフィンケルは、サドナウの教材を、ハイブリッド・スタディーズの重要な一部とみなしていた（Garfinkel 2002: 102）。少なくとも、エスノメソドロジストであったサドナウが世に問うたもののひとつにビデオ映像があったことは、示唆的であるように思われる。

様々な社会学が様々に映像を利用していくとき、それらの比較検討は、その都度の研究関心において映像が利用されている具体的な水準においてなされるべきであるだろう。このときエスノメソドロロジー研究を通じた「想起」や「教示」、またはその研究成果としての映像という着想（や実践）は、社会学における映像利用の比較作業にさいして、ささやかながら、ひとつの検討材料を提示するものとなるだろう。

【付記】

本稿は、三田社会学会 2020 年度大会（2020 年 7 月 4 日（土））におけるシンポジウム「映像を使う社会学」での報告「エスノメソドロロジーにおける映像」をもとに、当日の議論なども踏まえながら改稿をしたものである。オーガナイザーの岡原正幸先生と登壇者の方々、コメンテーターの方々、そして質疑応答に参加してくださったオーディエンスの方々に感謝する。

【註】

- 1) エスノメソドロロジーを概観するためには、いくつかの教科書（前田・水川・岡田編 2007; 串田・好井 2010; フランシス・ヘスター 2014）が編まれているので、必要に応じて参照されたい。また、エスノメソドロロジーの近年の動向については、『社会学評論』における分野別研究動向（秋谷・平本 2019）なども参照のこと。
- 2) 先にクルターに触れたが、本稿の読者の中には、エスノメソドロロジー研究がその着想のひとつに現象学、あるいはウィトゲンシュタインや日常言語学派の哲学（いわゆる概念分析）といった哲学的な基盤をもっていることを知っている者もいるかもしれない（浜 1999; 池谷 2001; 前田 2020; 西阪 1997, 2001; クルター 1998; 酒井他編 2009; 酒井他編 2016）。詳述する紙幅の余裕はないが、エスノメソドロロジー研究の成果がリマインダーやチュートリアルとして提示されうるのは、その基盤に現象学や言語哲学が位置づいていることと深くかかわっている。エスノメソドロロジー研究が対象となっている実践のリマインダー／チュートリアルのいずれのかたちで提示されるのであれ、それに先立ち分析者（エスノメソドロロジー研究の書き手）はその研究活動の過程において、実践の詳細を「想起」してい

- るのでなくてはならないはずだ（書き手自身が想起できないことを、その研究の読み手が想起することができるといことは、ありそうにない）。つまりエスノメソドロジー研究は常に、その研究過程において、書き手（分析者）自身が「想起こす」という省察的な作業を含んでいるのでなくてはならないのである。さて、現象学（的社会学）であれ（浜 1999; 池谷 2001; 前田 2020）、あるいは概念分析（の社会学）（西阪 1997, 2001; クルター 1998; 酒井他編 2009, 2016）であれ、そこには、分析者の省察活動がともなっているものでなくてはならないであろう。エスノメソドロジー研究と現象学や概念分析といった哲学的伝統は、まさにこの省察という点において交わっている。
- 3) ガーフィンケルも注意を促しているように、ある研究が「ハイブリッド・スタディーズ」と呼べるものになるかは、偶然的である（Garfinkel 2002: 98）。
 - 4) 参考までに、たとえば 2018 年から発行が開始された『社会的相互行為 *Social Interaction: Video-Based Studies of Human Society*』というオンラインのジャーナルには、再生可能な映像を埋め込むことができる。こうした試みを筆頭に、エスノメソドロジー研究の「成果」として映像を利用することにかかわる試みは、これからもなされるであろう。
 - 5) あえて付記しておく、こうした議論において主たる関心をむけられているのはいくつかの例外を除けばあくまでも技術論であり、必ずしもそこには方法論的な省察作業が常に伴っているわけではない。すなわち、映像をいかなる方法とともに利用するかということは論じられるが、映像を利用することによってなぜエスノメソドロジー研究をすすめることができるのか、映像を利用することでエスノメソドログイストたちはどのような知見をいかにして正当化しているのか、またはそこで知見の正当化がなされているということはどのように了解可能となっているのか、……等々といった点には、必ずしも論じられてはいないように思われる。
 - 6) サドナウ・メソッドの教材の一部は、現在オンライン（<https://www.sudnow.com>）で視聴などが可能である。

【文献】

- 秋谷直矩、2017、「ビデオカメラを用いたエスノメソドロジー研究の展開——機材の発展と研究法の進展」[Heath, C., Hindmarsh, J., & Luff, P. 『*Video in qualitative research: Analyzing social interaction in everyday life*』] 『質的心理学研究』16: 223–225。
- 、2019、「相互行為分析のアイデア——ワークプレイス研究とのかかわり」『日本労働研究雑誌』61(4): 25–29。
- 秋谷直矩・平本毅、2019「分野別研究動向（エスノメソドロジー）——エスノメソドロジー・会話分析研究の広がり」『社会学評論』70(1): 43–57。
- Coulter, Jeff. 1983. “Contingent and A Priori Structures in Sequential Analysis.” *Human Studies* 6(1): 361–76.
- クルター, ジェフ、1998、『心の社会的構成——ヴィトゲンシュタイン派エスノメソドロジーの視点』（西阪仰訳）新曜社。
- 團康晃、2016、「学校の中の調査者——問い合わせから学校の中ですごくすまで」前田拓也・秋谷直矩・朴沙羅・木下衆編『最強の社会調査入門——これから質的調査をはじめるときのために』ナカニシヤ出版、119–31。
- フランシス, デイヴィッド・ヘスター, スティーヴン、2014、『エスノメソドロジーへの招待——言語・社会・相互行為』（中河伸俊・岡田光弘・是永論・小宮友根訳）ナカニシヤ出版。
- Garfinkel, Harold. 1967. *Studies in Ethnomethodology*. Prentice-Hall.
- 、2002. *Ethnomethodology's Program: Working Out Durkheim's Aphorism*. Edited by Anne Warfield Rawls. Rowman & Littlefield.
- ガーフィンケル, ハロルド、1995、「日常活動の基盤——当たり前を見る」（北沢裕・西阪仰訳『日常性の解剖学——知と会話』マルジュ社、31–92。
- 、2004、「アグネス、彼女はいかにして女になり続けたか——ある両性の人間の女性としての

- 通過作業とその社会的地位の操作的達成」山田富秋・好井裕明・山崎敬一訳『エスノメソドロロジー——社会学的思考の解体』新装版、せりか書房、233-322。
- Goodwin, Charles. 1981. *Conversational Organization: Interaction Between Speakers and Hearers*. Academic Press.
- . 1993. “Recording Human Interaction in Natural Settings.” *Pragmatics* 3(2): 181-209.
- 、2010、「プロフェッショナル・ヴィジョン——専門職に宿るものの見方」北村弥生・北村隆憲訳『共立女子大学文芸学部紀要』56: 35-80。
- 浜日出夫、1999、「シュツ科学論とエスノメソドロロジー」『文化と社会』1: 132-53。
- ten Have, Paul. 2004. *Understanding Qualitative Research and Ethnomethodology*. SAGE Publications Ltd.
- . 2007. *Doing Conversation Analysis*.: SAGE Publications, Ltd.
- 細馬宏通・菊地浩平編、2019、『ELAN 入門——言語学・行動学からメディア研究まで』ひつじ書房。
- 池谷のぞみ、2001、「生活世界と情報」田村俊作編『情報探索と情報利用』勁草書房、41-90。
- 、2007、「EM における実践理解の意味とその先にあるもの」前田泰樹・水川喜文・岡田光弘編『エスノメソドロロジー——人びとの実践から学ぶ』新曜社、248-57。
- 、2016、「フィールドワークとデータセッションで気をつけること——エスノメソドロロジーの態度とは」『現象と秩序』4: 99-118。
- 、2019、「社会課題とエスノメソドロロジー研究との関わり——救急医療におけるワークの研究を中心に」『年報社会学論集』32: 12-22。
- Jayyusi, Lena. 1993. “The Reflexive Nexus: Photo-practice and Natural History 1.” *Continuum* 6(2): 25-52.
- Jefferson, Gail, 2004, “Glossary of Transcript Symbols” *Conversation Analysis: Studies from the First Generation*. Amsterdam: John Benjamins, 13-31.
- 木下衆、2016、「フィールドノートをとる——記録すること、省略すること」前田拓也・秋谷直矩・朴沙羅・木下衆『最強の社会調査入門——これから質的調査をはじめる人のために』ナカニシヤ出版、103-18。
- 是永論、2017、『見ること・聞くことのデザイン——メディア理解の相互行為分析』新曜社。
- 串田秀也、2010、「言葉を使うこと」串田秀也・好井裕明編『エスノメソドロロジーを学ぶ人のために』世界思想社、18-35。
- 串田秀也・好井裕明編、2010、『エスノメソドロロジーを学ぶ人のために』世界思想社。
- Livingston, Eric. 1987. *Making Sense of Ethnomethodology*. Routledge & Kegan Paul.
- 前田泰樹、2020、「現象学とエスノメソドロロジー——経験の一人称性と社会性」『フッサー研究』17: 87-106。
- 前田泰樹・水川喜文・岡田光弘編、2007、『エスノメソドロロジー——人びとの実践から学ぶ』新曜社。
- 松永伸太郎、2017、『アニメーターの社会学——職業規範と労働問題』三重大学出版会。
- 、2020、『アニメーターはどう働いているのか——集まって働くフリーランサーたちの労働社会学』ナカニシヤ出版。
- 南出和余・秋谷直矩、2013、『フィールドワークと映像実践——研究のためのビデオ撮影入門』ハーベスト社。
- Mondada, Lorenza, 2007, “Multimodal Resources for Turn-Taking: Pointing and the Emergence of Possible Next Speakers,” *Discourse Studies*, 9(2): 194-225.
- 西阪仰、1997、『相互行為分析という視点——文化と心の社会学的記述』金子書房。
- 、1998、「概念分析とエスノメソドロロジー——『記憶』の用法」山田富秋・好井裕明編『エスノメソドロロジーの想像力』せりか書房、204-272。
- 、2001、『心と行為——エスノメソドロロジーの視点』岩波書店。
- 、2018a、「会話分析はどこへ向かうのか」平本毅・横森大輔・増田将伸・戸江哲理・城綾実編『会話分析の広がり』ひつじ書房、253-279。
- 、2018b、「訳者あとがき」『会話分析の方法——行為と連鎖の組織』世界思想社 203-12。
- Nishizaka, Aug, 2015, “Facts and Normative Connections: Two Different Worldviews,” *Research on Language and Social Interaction*, 48(1): 26-31.

- 酒井信一郎、2010、「メディア・テキストのネットワークにおける成員カテゴリー化の実践」『マス・コミュニケーション研究』77：243-59。
- 酒井泰斗・浦野茂・前田泰樹・中村和生編、2009、『概念分析の社会学——社会的経験と人間の科学』ナカニシヤ出版。
- 酒井泰斗・浦野茂・前田泰樹・中村和生・小宮友根編、2016、『概念分析の社会学——実践の社会的論理』ナカニシヤ出版。
- サドナウ, デヴィッド、1993、『鍵盤を駆ける手——社会学者による現象学的ジャズ・ピアノ入門』（徳丸吉彦・村田公一・ト田隆嗣訳）新曜社。
- Sudnow, D., 2001, *Ways of the Hand: A Rewritten Account*, The MIT Press.
- 徳丸吉彦、1993、「訳者あとがき」サドナウ, デヴィッド『鍵盤を駆ける手——社会学者による現象学的ジャズ・ピアノ入門』（徳丸吉彦・村田公一・ト田隆嗣訳）新曜社、257-264。
- 鶴田幸恵、2009、『性同一性障害のエスノグラフィ——性現象の社会学』ハーベスト社。
- 浦野茂、2004、「実践の中の視覚——身体的行為と見ることの分析」山崎敬一編『実践エスノメソドロジー入門』有斐閣、158-68。
- Watson, Rod. 2009. *Analysing Practical and Professional Texts: A Naturalistic Approach*. Ashgate Publishing.
- 山崎敬一・山崎晶子・鈴木栄幸・三樹弘之・葛岡英明、1997、「ビデオデータの分析法——ビデオとコンピュータを利用した新しいデータの分析法」山崎敬一・西阪仰編『語る身体・見る身体』ハーベスト社、285-312。
- 山崎晶子・菅靖子・葛岡英明、2004、「調査の準備とビデオデータの分析法——博物館調査を例として」山崎敬一編『実践エスノメソドロジー入門』有斐閣、60-70。

（よしかわ ゆうき 立教大学）